

クキゾウムシも悲しいのだよ

：ネグロスとの連帯の礎を築いた
故グリーンコープ連合兼重専務
10周年に寄せて

グリーンコープのすべての取り組みには、四つの共生（自然と人・人と人・女と男・南と北）の理念が貫かれています。その中の「南と北の共生」は、ネグロスとの連帯をおして具現化してきました。

今ではあたり前のようにカタログに掲載されているネグロスバナナとマスコバド糖。想像もできない程の困難な状況乗り越え、私たちのようにになりました。その民衆交易の成功・発展に大きく貢献し、連帯の礎をつくったのが当時グリーンコープ連合専務理事であった故兼重正次さん（1995年8月30日没）です。

兼重さんの足跡をたどり、その功績をひもといてみましょう。



故兼重さんを偲ぶツアー（「縁をつむぐ会」主催のネグロスメモリアルツアー）が4月10～14日に行われ、会員15人が参加。グリーンコープとネグロスとの連帯の歴史を確認する旅となった。10周年忌セレモニー（4/12）には、グリーンコープ連合の行岡専務と兼重さんと共にネグロスを奔走して民衆交易を築いた堀田さん（ATJ社長）、ネグロス現地からは兼重さんとゆかりのある人たちが駆けつけた。

※グリーンコープ設立に尽力した人、それを引き継いで歴史をつくってきた人、これから運動を創造していく人、それぞれが出会い、柔軟な連帯と協同の輪をつくっていくことを目的にした会。1997年発足



友よ 永遠に
あなたがくれた
勇気と力は
いつまでも私たちのながで生き続ける
あなたが描いた夢のすべてを
私たちは追い求めよう
友よ 永遠に
あなたは多くの人々の心に
永遠に生き続ける

10周年で兼重さんに捧げられた歌

「クキゾウムシも悲しいのだよ」。兼重さんの墓碑に刻まれている言葉。未来への希望と連帯を象徴する言葉として、今でもネグロスで語り継がれている。

飢餓の島
ネグロスとの出会い

世界的な砂糖価格の暴落で飢餓の島となったフィリピン・ネグロス。それに対し、世界中が支援に動いた。日本では1986年、日本ネグロスキャンペーン委員会が立ち上がった。グリーンコープの前身生協である共生社が即座に緊急援助に取り組み、同時に継続的支援のためにマスコバド糖の輸入に踏み切った。当時のマスコバド糖はさとうきびの搾り汁を露天で煮詰めただけで搾り滓などの不純物

が混入した、とても商品とは言い難いものだった。1988年グリーンコープ連合結成。兼重さんは足繁くネグロスに通い、現地の農民と誠実に向き合い、マスコバド糖を完成された商品に作り上げていった。異なる社会的背景（歴史、文化、生活習慣など）を越え、人と人の関係によって成し遂げられたと言えるのかもしれない。

要だった。そこにバナナが登場することになる。

の目にも順調に自立へ歩んでいくかと思えた。

バナナの民衆交易の危機

1993年、バナナ山が変調をきたした。山に生息するクキゾウムシがバナナの根や莖に巣食うようになったのだ。輸出すればお金に還元できるバナナを多植しすぎたことが原因だった。クキゾウムシを全滅させるため山に火を放つという策を現地の人が提言した時、兼重さんはそつと言った。「クキゾウムシも悲しいのだよ」。山の生態系を壊し、クキゾウムシの生きる場所を奪ってしまったのは人間なんだという意味が込められている。人間の愚かさが招いた出来事に自然と共生していくことの大切さを思い知ったのだ。

現地の人が食べない
バナナをバナナに
決めた

一時的な救済はあくまでも利他的なもの。真の救済とはネグロスが自立へ向けて歩み出せるようになることだ。そのためにはマスコバド糖に加えて民衆交易にもうひとつの「モノ」が必要だった。そこにバナナが



「クキゾウムシ…」の言葉が刻まれた墓碑。この場所はカンラオン山の麓にあり、カネシゲパークとして現地の人に親しまれている